『人文社会論叢』人文科学篇27, 2012, pp. 59-64.

敦煌出土西夏語佛典に挿入されたウイグル文雜記

松　井　　太

1．はじめに

10世紀以降，13～14世紀のモンゴル帝國時代に至るまでの，トルコ系ウイグル人と西夏人＝タングト（Tangut）人との關係・交涉は，歷史・文化・宗教・言語など，中央アジア研究の諸方面からする考察の對象となっている。ただし，それらの考察の多くは，漢文史料を中心とする編纂史料に依據しており，ウイグル人・西夏人が彼ら自身の言語すなわちウイグル語・西夏語で書き殘した中央アジア出土文獻資料の利用は十分とはいえない段階にある。

そこで本稿では，敦煌莫高窟出土の西夏語佛典斷片に挿入されたウイグル文雜記の檢討を通じて，ウイグル・西夏關係史の一端を明らかにしたい。

2．資料と校訂

本稿で檢討する西夏語佛典斷片は，現在，米國プリンストン大學の東アジア圖書館（Princeton University, the East Asian Library and the Gest Collection）に，Peald 6f という所藏番號のもとで保管されており，紙寸は 15.6 x 18.8 cm である。

この Peald 6f 斷片の西夏文テキストについては，荒川愼太郎（東京外國語大學）氏が研究を進められており，「プリンストン大學所藏西夏文佛典斷片（Peald）について」と題する校訂研究を發表される予定である［荒川 2012］。荒川氏によれば，この西夏文は，漢譯『阿毘達磨大毘婆沙論（Skt. *Abhidharma-mahāvibhāṣāśāstra*）』（大正新脩大藏經 Vol. 27, No. 1545, p. 150, c12-20）に對應するものであり，同じくプリンストン大學所藏の西夏語佛典斷片 5 点（Peald 6c, 6d, 6e, 6h, 6i），さらには天理圖書館所藏の西夏語佛典 1 点（Txd 39-08b）も，この Peald 6f 斷片と同一の版本に由來するものである［荒川 2011, p. 148; 荒川 2012, pp. 6-7］。なお，これらの西夏語斷片の紙背は，いずれもウイグル語曆占文獻として再利用されている。このウイグル語曆占文獻は，草書體で書かれていることから 13～14 世紀のモンゴル時代に屬すると判斷され，本來のオモテ面の西夏文と直接には無關係と考えられる［cf. 松井 2011, pp. 32, 42］。このうち，Peald 6e と，敦煌莫高窟北區第 157 窟出土の B157:54-2 斷片が直に接合するので［荒川 2011, pp. 148-149; 松井 2011, p. 32］，これらプリンストン大學所藏斷片群は莫高窟北區第 157 窟から將來されたと考えられる。

さて，荒川氏によれば，問題の Peald 6f 斷片の西夏文第一行は，『阿毘達磨大毘婆沙論』の章題である「雜蘊第一中愛敬納息第四［之一］」（大正新脩大藏經 Vol. 27, No. 1545, p. 150, c12）に同定される。現存するテキストは「第四」で改行されており，章題末の「之一」に相當する西夏文

論文32

は，破損缺落した第２行の冒頭部分に記されていたと考えられる。従って，現存の西夏文第２行は，本來は第３行であったことになる。この第３行もやはり上端部分を缺くものの，さきの章題に續く「［云何愛］，云何敬，如是等章」に相當する西夏文が記されている［荒川 2012, pp. 8, 13］。

ところで，オモテ面西夏文の第１行・第３行の間（缺落している本來の第２行の下）の空白部には，ウイグル文が記されている。このウイグル文の筆跡はウラ面の曆占文獻とは異なり，きわめて乱雑・拙劣ではあるが，明らかにウイグル語であることが確認できた。

まず，空白部の上方の２行の校訂案を示す。

【翻字】	【轉寫】
1．PYRD’ 𗍫	birdä 𗍫
2．TWRT	tṛort

第１行（左行）の PYRD’ は birdä と轉寫し，bir「１，一」に位格語尾 –dä が接續しているものとみてよい。第２行の TWRT は tṛort と再構し，TWYRT = tört 「４，四」の誤記とみることができる。従って，この第１～２行は，birdä tṛort 「１の４；１のうちの４」と和譯できる。

なお，第１行の birdä の下には，上掲校訂にも示したように 𗍫 という文字らしきものが記されている。荒川愼太郎氏によれば，これは「１，一」を示す西夏文字 𗍫 の習書・略筆であり，おそらくはすぐ右隣の西夏文字（現存の西夏文第１行の第３字）を模寫したものと考えられるという［荒川 2012, pp. 8-9］。

上掲２行のウイグル文に續いて，その下方にはさらに２行のウイグル文が記される。垂直方向の配置に鑑みれば，この２行は，通常のウイグル文とは逆に，右行から左行に進んでいるものと考えられる。ただし，その判讀はきわめて困難である。

【翻字】	【轉寫】
3．ČWDK’Y TWYD 夫	čodk’i töḍ 夫
4．　　Č’W PYRD’	Č’W birdä

第３行の ČWDK’Y は čodk’i と轉寫できる。これはおそらく ČWD’KY = čodaki ~ čodake 「質問者，問（< Skt. codaka）」［庄垣内 2008, p. 542］の誤記とみるべきであろう[1]。後續する TWYD は töḍ と再構し，やはり tö(r)ḍ ~ tört 「４，四」の誤記と考えることができる。その直下の，漢字の「夫」のようにみえるものの意味は不明である。第４行の Č’W が ČW の誤記ならば，それは ČWD’KY = čodaki と記そうとしたものを中斷したのかもしれない。第４行末の birdä = PYRD’ 「１に」は，語頭の P- と後續の -Y- が一旦中斷して書かれており，また -D- の左方にふくらむ筆致が小さすぎるため直前の -Y- と区別し難い状態となっている。

[1] この點，Peter Zieme 教授（ベルリン科學アカデミー）から示唆を頂戴した。特記して深謝する。

論文32

以上から，この第３～４行は， čod(a)ki tö(r)ḍ čo[daki?] birdä 「問４の（問？） １に」と解釋されるものとなる。

３．資料の解釋と歴史學的考察――ウイグル佛教と西夏佛教――

このように本處のウイグル文雜記全體を「１の４，問４の（問？） １に」と解釋できるとすれば，それは本來の西夏文『阿毘達磨大毘婆沙論』の「雜蘊第一中愛敬納息第四［之一，云何愛］，云何敬，如是等章」という章題を翻譯したものであり，その意味するところは「［雜蘊の］第一のうちの第四［である愛敬納息］，この第四の問答（＝愛敬納息）の一に」とみなせるものと，筆者は考える[2]。この「ウイグル譯」に挿入される čodaki 「質問者，問」は，當該の『阿毘達磨大毘婆沙論』の章題が「云何愛，云何敬」というように問答形式をとっていることに關連するのであろう。實際に，『阿毘達磨倶舍論實義疏』をはじめとするウイグル文アビダルマ論書でも，čodaki は問答を導く際に多用されている［庄垣内 2008, lines 79, 2596, 2658, 2827, 3559］。

すなわち，このウイグル文雜記の筆者は，本來の西夏文『阿毘達磨大毘婆沙論』の章題の意味を，ほぼ正しく理解していたことになる。このウイグル文雜記の筆跡はきわめて拙劣であり，また「４，四（tört = TWYRT）」のような基礎的な數詞すら書き誤っている（tṛort = TWRT ~ töḍ = TWYD）ことに留意すると，その筆者がウイグル人であったとはいささか考えにくい。しかしながら，荒川愼太郎氏のご教示によれば，ウイグル文雜記の第１行末にみえる西夏字の略筆・習書（）も，やはり基礎語彙である數詞 「１，一」の書寫にしてはあまりに拙劣であって，生粋の西夏人が記したものとは考えられないという［荒川 2012, p. 9］。また，西夏語を母語とする西夏人が，西夏語の佛典それも章題のみをわざわざウイグル語に譯して，本來の西夏語佛典に記しておく必然性もない。とすれば，我々のウイグル文雜記は，やはりウイグル語を母語とするウイグル人により記されたものとみなすのが妥當であろう。おそらく，ウイグル人佛教徒が，自身の母語ではない西夏語で記された佛典を學習するにあたり，その章題のみを翻譯し，内容を推知させるメモとして記しておいたようなものではなかろうか[3]。

問題の西夏語『阿毘達磨大毘婆沙論』斷片が發見された敦煌莫高窟からは，古ウイグル語のアビダルマ系文獻の斷簡類も發見されている［百濟 1982; 百濟 1984, p. 65; 百濟 1986, pp. 155-153; 張鐵山 2002; 張鐵山 2003, pp. 49-52; Yakup 2006, pp. 4-10; 庄垣内 2008, pp. 1-2; Aydar 2009, pp. 82-84］。これまで知られている限り，これらの敦煌發現のウイグル語アビダルマ系佛典の原典は，全て漢文である。眼を廣くトゥルファン・敦煌發現のウイグル語佛典全般に轉じても，その大多數は，漢文・サンスクリット語・トカラ語・チベット語から飜譯されたものであって，西夏語佛典を原典と

---

[2] ただし，第１～２行も，後述の第３～４行と同じく右から記されていた可能性も，完全には排除できない。その場合でも，第１～２行の tṛort birdä 「４（の） １に」は，第３～４行の čod(a)ki tö(r)ḍ ČW birdä 「問４（の） １に」と同じ内容を記したものであると解釋できるだろう。

[3] このような推測に至るまでには，荒川愼太郎氏から多くの示唆を得た。特記して深謝する。ただし，この推論はあくまで筆者の責任で提示しているものである。

論文32

するウイグル語佛典の存在は知られていない[4]。また，第464・465窟（Pelliot 編号181・182窟）を中心とする敦煌莫高窟北區石窟（その多くはモンゴル時代に開鑿・重修された）中には，ウイグル語佛典と西夏語佛典が同時に發見された窟が少なくない。その歴史的背景については，モンゴル時代のウイグル人佛教徒が西夏語佛典を利用していたと推測されてきたが［森安 1985, p. 74 & n. 90; cf. DMBS III, p. 53］，具體的な證明を伴っていたわけではない。

これに對して，前節までに示したように，我々のウイグル文雜記は，モンゴル時代の甘肅河西地域に西夏文『阿毘達磨大毘婆沙論』を學習していたウイグル人佛教徒が存在していたことを實證する。これを敷衍すれば，モンゴル時代の甘肅河西地域のウイグル人佛教徒たちが西夏語佛典から佛教文化を摂取していたということを，より積極的に推測することができる[5]。

ウイグル語文獻・西夏語文獻とも，それぞれの歴史學的・佛教學的・言語文獻學的な研究蓄積はなお途上にあり，これらの出土文獻を用いたウイグル・西夏關係史の解明もなお途上にあるといえる。本稿で扱ったウイグル文雜記はまさに斷簡零墨にすぎないとはいえ，ウイグル人佛教徒と西夏佛教の具體的な交流を示す資料として，今後の研究の進展に資するものであると考える。

参考文獻目録

荒川 愼太郎 2011:「プリンストン大學所藏西夏文華嚴經卷七十七譯注」『アジア・アフリカ言語文化研究』81, pp. 1-48.

荒川 愼太郎 2012:「プリンストン大學所藏西夏文佛典斷片（Peald）について」『アジア・アフリカ言語文化研究』83, pp. 5-36.

Aydar Mirkamal 阿依達爾=米爾卡馬力 2009:「敦煌莫高窟北區新出回鶻文文獻總述」『敦煌學輯刊』2009-2, pp. 81-88.

DMBS = 彭金章・王建軍・敦煌研究院（編）『敦煌莫高窟北區石窟』全３卷。文物出版社，2000-2004.

耿 世民 1986:「回鶻文『大元肅州路也可達魯花赤世襲之碑』譯釋」『向達先生紀念論文集』新疆人民出版社，pp. 440-454.

百濟 康義 1982:「ウイグル譯『阿毘達磨順正理論』抄本」『佛教學研究』38, pp. 1-27.

百濟 康義 1984:「ウイグル譯『阿毘達磨倶舍論』初探」『龍谷大學論集』425, pp. 65-90.

---

[4] なお，モンゴル支配時代以前の西夏王國での漢文佛典の西夏語譯經事業においてウイグル人佛教徒が大きな役割を果たしたとする記事が，漢籍資料中には散見する。また，モンゴル時代の西夏人行政官の一族の歴史をウイグル語で記録した『大元肅州路也可達魯花赤世襲之碑』［耿世民 1986］など，甘肅・河西地域の西夏人にウイグル語文化が受容されていたことを示す資料も實在する。しかしながら，これまで確認されている西夏語佛典中には，ウイグル語佛典を原典とするもの，ウイグル佛僧によって西夏語譯されたもの，さらにはウイグル語から言語的な影響を蒙ったと考えられるものは，一切發見されていない［Kychanov 1968, pp. 286, 287-278; Kychanov 1978, p. 208; Kychanov 2004, p. 156; 西田 1975, pp. 5-6; 森安 1985, p. 88 & n. 27］。

[5] 例えば，天理圖書館所藏の敦煌出土ウイグル語譯『阿毘達磨大毘婆沙論』（もしくはその異本の『阿毘曇毘婆沙論』）の内容には漢文原典から少し異なる箇所が含まれることが指摘されている［百濟 1986, pp. 155-153］。そのような漢文・ウイグル文の内容的相違の背景に，西夏文『阿毘達磨大毘婆沙論』の影響を想定することができるかもしれない。

百濟 康義 1986:「天理圖書館藏ウイグル語文獻」『ビブリア』86, pp. 180-127 + 4 pls.

Kychanov, Evgeny. 1968: *Ocherk istorii tangutskogo gosudarstva*. Moskva.

Kychanov, Evgeny. 1978: Tibetans and Tibetan culture in the Tangut state His-Hsia (982-1227). In: L. Ligeti (ed.), *Proceedings of the Csoma de Kőrős Memorial Symposium*, Budapest, pp. 205-211.

Kychanov, Evgeny. 2004: Turfan und Xixia. In: D. Durkin-Meisterernst et al. (eds.), *Turfan revisited*, Berlin, pp. 155-158.

松井 太 2011:「敦煌出土のウイグル語曆占文書」『人文社會論叢』人文科學篇26, pp. 25-48.

森安 孝夫 1985:「ウイグル語文獻」山口瑞鳳（編）『敦煌胡語文獻』（講座敦煌 6）大東出版社, pp. 1-98.

西田 龍雄 1975:『西夏文華嚴經』第 1 卷。京都大學文學部。

岡崎 精郎 1960:「タングート・ウイグル交涉過程の研究」『第五回日本西藏學會紀要』。

岡崎 精郎 1972:『タングート古代史研究』東洋史研究會。

庄垣内 正弘 2008:『ウイグル文アビダルマ論書の文獻學的研究』松香堂。

Yakup, Abdurishid 2006: Uighurica from the Northern Grottoes of Dunhuang.『ユーラシア諸言語の研究（庄垣内正弘先生退任記念論集）』同刊行会, pp. 1-41.

張 鐵山 2002:「敦煌莫高窟北區B52窟出土的回鶻文『阿毘達磨俱舍論實義疏』殘葉研究」『敦煌學輯刊』2002-1, pp.

張 鐵山 2003:「敦煌莫高窟北區出土三件回鶻文佛經殘片研究」『民族語文』2003-6, pp. 44-53.

付記：本稿は，科學研究費（基盤研究（A）・基盤研究（B）・基盤研究（C））ならびに三菱財團人文科學研究助成による研究成果の一部である。また，荒川愼太郎（東京外國語大學）氏からは，プリンストン大學所藏西夏語佛典に關する氏の研究成果（荒川 2012）を原稿段階で利用することをお許しいただき，あわせて多岐にわたるご教示を頂戴した。末筆ながら，深甚の謝意を示すものである。

Peald 6f recto



The East Asian Library and the Gest Collection, Princeton University
http://idp.bl.uk/database/oo_scroll_h.a4d?uid=159286112011;recnum=79512;index=1

論文32

執筆者紹介

奥　野　浩　子（情報行動講座／英語学）
多　田　恵　実（弘前大学非常勤講師／英語教育）
飯　　考　行（公共政策講座／裁判法）
瀧　上　　明（弁護士）
木　村　宣　美（コミュニケーション講座／英語学）
松　井　　太（国際社会講座／内陸アジア史）
李　　梁（思想文芸講座／中国思想史）

編集委員（五十音順）

◎委員長
加　藤　惠　吉
北　島　誓　子
柑　本　英　雄
児　山　正　史
作　道　信　介
佐　藤　和　之
◎四　宮　俊　之
田　中　岩　男
田　中　一　隆
宮　坂　　朋
山　本　秀　樹

人文社会論叢（人文科学篇）
第 27 号
2012 年 2 月 29 日

編　集　　研究推進・評価委員会

発　行　　弘前大学人文学部
036–8560 弘前市文京町 1 番地
http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/

印　刷　　ワタナベサービス株式会社
030–0803 青森市安方 2–17–3

論文32

Studies in the Humanities

CULTURAL SCIENCES

Number27

OKUNO Koko, TADA Megumi … English Education at Elementary School in Aomori and Korea …… 1

II Takayuki, TAKIUE Akira The Role of Attorneys and Law in the Areas on the Pacific of Iwate Prefecture after the East Japan Great Disaster: Mainly Focusing on the Questionnaire Survey on the Victims in Kamaishi and Otsuchi Temporary Housing ……11

KIMURA Norimi …… Backward Conjunction Reduction in Japanese ……37

MATSUI Dai …… Uigur scribble on a Tangut Buddhist fragment from Dunhuang ……59

LI Liang …… Descriptive Poetry and poetic Site: the Poetry of Chu-hsi (1130 ～ 1200)composed on the Mt. Wuyishan（武夷山）……65

Faculty of Humanities
Hirosaki University
Hirosaki, Japan

ISSN1344-6061

論文32